

庭中の花の作歌一首 并せて短歌

四一一三番

おほきみ 大君の 遠の朝廷と 任きたまふ 官のまにま  
ゆきふ み雪降る 越に下り来 あらたまの 年の五年  
しきたへの 手枕まかず 紐解かず 丸寝をすれ  
ば いぶせみと 心なぐさに なでしこを や  
どに蒔き生ほし 夏の野の さ百合引き植ゑて  
咲く花を 出で見ることになでしこが その花妻  
に さ百合花 ゆりも逢はむと 慰むる 心し  
なくは 天離る 鄙に一日も あるべくもあれや

反歌二首

四一一四番

なでしこが 花見るごとに 娘子らが 笑まひの  
にほひ 思ほゆるかも

四一一五番

さ百合花 ゆりも逢はむと 下延ふる 心しな  
くは 今日も経めやも